

文学者の戦争責任論ノ一ト(四)

高橋 新太郎

鎌倉文庫発行の「人間」(木村徳三編輯)昭和二十一年四月号は、荒正人・小田切秀雄・佐々木基一・堀谷雄高・平野謙・本多秋五ら「近代文学」同人の座談会「文学者の責務」と長谷川如是蘭の「戦争と文学者の責任」を載せた。その「編輯後記」で木村は、(この戦争をめぐる文学者の責任についての徹底的な反省と、それに對する真剣な検討とが、われ／＼の最も重大な義務であることは云ふまでもない。文学者の責務——それは、文化人・文学者に於る戦争責任者追及といふ目下の急務を超えて、日本の将来についての根本的な、そのためにはすべての文学者が生涯を賭けねばならない「人間性の確立」といふ課題につながる事なのである)と、この小特集の意図を記した。中野好夫は時事通信社の日刊時事解説版「時論要解」(昭和二十一年三月一日)の「文学者と戦争責任」でこれを取り上げ、如是蘭については、彼自身が判決を与える立場ではなく、まず裁かれる立場にあることへの無自覚を批判した。前に記した荒正人・小田切秀雄・佐々木基一らの「文学時評」(昭和二十一年一月一日〜十一月十日通巻13号)の「文学検察」欄で、実際には不発に終わったが、中野好夫も青野季吉・和辻哲郎・谷川徹三らと共に、追及弾劾の対象としてリストアップされてもいたのであった。これらに先立ち、中野好夫は「新生活」創刊号(昭和二十年十一月)に「文化再建の首途に——真の文化建設を阻害するものは曰く老朽文化人・曰く旧新聞人である」を発表し、五十代以上の文化人への強い不届を表明するとともに(私は占領軍最高司令部の前にはつきり言ふが、私はわが戦争に極力協力した。しかも便乗して協力した。はつきり言明しておく。かつて戦争中、「私は便乗者だ。開戦直前まで私は実に平和に恋々たる人間であつ

たが、宣戦大詔とともに戦争に便乗した。便乗でもなんでもよい。誰れが便乗しないでゐられるのか」と書いたが、今でもこれを取消さうとは少しも思はない)とその心情を明らかにし、そしてこうも言う。(とにかく私には、文学者の良心と生命にかけて言ふが、戦争中傍観したことがまるで美德であつて、協力したことが無良心だといふやうなへ求論理はどうしても分らん。いかにも自己弁護かもしれない。だがこの自己弁護は今後ともに臆面もなく押し通すつもりだ。青年達が戦争に純真な精神を捧げつくした事、それは立派なことだと私は言ひたい)と。中野はまた、「時事新報」の(文化界ではだれが戦争責任者か)とのアンケートに「中野好夫」と回答してもいる。「文学検察」に指弾される中野好夫は、もっとも早く、自己の主體的責任の自覚から戦後の出発を果した人格でもあった。

前記「近代文学」同人座談会で平野謙は、(小林秀雄の立場は、戦争に処した文学者の態度としてやはりひとつのギリギリ結着な道を現してゐたと思つてゐる)と発言し、この平野発言を弁護するかたちで本多秋五は、(戦争中平野は「新潮」に中野重治を礼讃した文章を書いたよ。あの時勢にあれだけ中野重治を持ち上げて書くについては、それ相応の覚悟であつた筈だ。さういふものをかいてゐた平野は、無条件に小林秀雄を肯定してゐたとは思はれない。小林秀雄が自己に忠であり、ベシミスティックなものに行かざるを得なかつた、そしてその過程で過ちを犯したけれども、さういふ道を進んだといふことはよく分る、抽象して自分自身に忠実であつたといふ点は立派だと思ふ。それである戦争のさ中においても平野のとつた道は、小林秀雄が戦争に叩いた太鼓に合奏してはゐなかつた。だから平野の言葉を僕は不完全な表現でないかと思ふのだね)という。本多の発言は、平野の「青春の文学」(「新潮」昭和18年6月)を念頭においてのものである。小林秀雄は、中山和子の言葉を借りれば、(平野謙の転向のひそかな免罪符)(「平野謙論——文学における宿命と革命」一九八四年十一月 筑摩書房)であつたにちがいない。中山和子の「平野謙論」には、(小林秀雄の「宿命」の畧によらんとして、中野重治の「革命」の畧にひきさかれようとする)平野謙独特のドラマという文言もある。そして中山和子はいふ。(「宿命の理論と戦争責任問題の間で、ひそかにふるい立とうとしていた平野謙に、やがてあきらかにみえてきた道は、戦争責任追及のホコ先を責任者として自明な対象へ向けるより、戦争に責任を感じずべき一切の者へ向けるたたかひの必要であつた。……戦争責任を追及する陣営の主体の側の責任を問う必要はないであろうか。大量転向を結果しなければならなかつた革命運動主体の責任。広範な戦争反

対を組織しえなかつた、そして転向者たちに積極的戦争協力を果させることになったその責任、というものはないのか。……「罪なきものは無かつた」というのが、宿命の思想をふまえつつ、革命の方向に「歩みだそうとした、平野謙の戦争責任論のうけとめかたであつた、と思われる」。

かくて平野謙は、『新生活』（昭和21年4、5月合併）の文藝時評で中野とのいわゆる「政治と文学」論争の発端となる、杉本良吉・岡田嘉子・樺太越境事件を枕に置いた「ひとつの反指定」を書き、次いで同誌に「基準の確立」（昭和21年6月）「政治と文学（一）」（昭和21年7月）を、さらに「政治の優位性」とは何か（『近代文学』昭和21年10月）「政治と文学（二）」（『新潮』昭和21年10月）と続くのである。そして中野重治は、（彼らは正しいか、また美しいか。人間の文学を育てようとする、あるいは文学を人間的に育てようとするというその批評自身人間的であるか」と問ひ直す「批評の人間性」——平野謙・荒正人について）（『新日本文学』昭和21年7月）をはじめ、「批評の人間性（二）」（『新日本文学』昭和22年6月）、「批評の人間性（三）——平野謙・荒正人について」（『展望』昭和22年3月）を書く。これらの平野をはじめとする『近代文学』同人達と中野重治との応酬の最中に、のちに地谷雄高が「影絵の時代」（昭和52年9月、河出書房新社）で書き記す次の挿話の事実が介在することとなる。

中野重治から「反革命に流し目をしている」ときめつけられ、長年敬愛してきた中野重治と論争するようになって「私は哀しい」と悲痛に記した平野謙は、その論争がはじまってから暫らくたった或る日の同人会議の席上、本多秋五、荒正人、佐々木基一、私の前に「一通の分厚い手紙を置いたのである。……『政治と文学』論争がはじまったとき、この菊池寛宛ての中野重治の手紙を自分が秘密にもっている一ひとりだけ」の事態から大きく踏みで、「近代文学」全員が共有事項として、政治と文学論争のすぐ裏に位置するこの重要な拜啓を明確化しておこうと彼は考えたのである。その平野謙の踏みだしの姿勢には、文学の言葉は、本来、人間の弱さと強さをともに内包したところのもので、人間の強さだけ誇示する政治の言葉であつてはならないという動かすべからざる人間観、文学観があり、そしてまた、その平野謙の基本姿勢は、荒正人にも、さらに、この「政治と文学」論争ばかりでなくその他の多くの場合においても「隠れた沈黙の証人」となった本多秋五、佐々木基一、そして私の三人にも共通するところの一つの姿勢なのであつた。……」

の中野重治の旧文芸家協会会長、菊池寛宛ての手紙は、菊池寛がまず受けとると、当時文学報国会の文芸関係の課長であつた井上司朗に手渡され、その処理をゆだねられたのであつたが、暹子八郎という筆名で歌もよんだ井上司朗は課員である平野謙を、ちよつと、平野君、と課長席に呼んで、恐らく平野謙が生涯を通ずる熱烈な中野重治ファンであると知らずに、その手紙を読ませたのであつた。それを読んでいる裡に手がぶるぶる震えてきたと平野謙は私達に述べたが、中野重治の名譽のため、井上司朗から平野謙がその手紙を無理に乞うてもらつたものと私は思つていたところ、實際は、平野謙は井上司朗が席をはずしているとき、そのテーブルの引出しからその手紙を勝手に取り出したのださうである。つまりそれを取って盗み出してしまふほど平野謙は熱烈忠実な中野重治ファンだったのである。

重要事項はすべて全員会議で決めるとの方針に従つて、その手紙を私達全員の前に提出した平野謙は、論争の背景に於ける特別な事態の全容を明らかにしたものの、論争の「正当」な推移に神経質なほど気を使って、そのとき、その手紙を暫らく貸してくれと申し出た論争の共同者、荒正人に向つて、

「荒さん、その手紙は絶対に使わないでくださいよ。いいですか。すぐ返して下さい」といひ、なおも数瞬考えこんだあと、

「それから、荒さん、それは写しをとらないでくださいよ」

と慎重につけ加えたのであつた。けれども、この平野謙の起り得るべきあらゆる場合を想定して懸命に気を使ったあらかじめの深い配慮も、結局は、半分ほどしか役立たなかつたのである。「私は哀しい」と切実に述べる平野謙とは違つて、こんな文学報国会宛ての手紙を戦時中書いておきながら如何なる資格で俺達をせめるのかと、まさに荒正人流入に全身全霊をこめて憤激につぐ憤激を増幅しつづけた荒正人は、確かに、その手紙の写しをとらなかつたとはいへ、荒正人と並んで吾国における人間興味家の双璧ともいうべき大井広介と交わした電話の話のなかでその菊池寛宛ての手紙に触れ、そして、大井広介はひとつの文章のなかでその菊池寛宛ての手紙についてあつさり触れてしまつたのであつた。

この大井広介の文章がでてからまもなく、平野謙は、沈黙せる隠れた証人である「影の内閣」の私達の前に、また、一通の葉書を置いたのであつた。……その中野重治からの平野謙宛ての葉書には、文面の九割以上、或る書物についての質問が述べられており、最後の隅の一行に、ときに菊池寛宛ての僕の手紙が君のところへ行つてゐるさうだが、返し

てもらいたい、と記せられていたのであった。

いまから思い返してみても、これまた、予期せぬ遺書を私達の前に提出して、あの手紙を返すべきか否かを同人の全員会議にはかつて決定する平野謙の公正さに感心せざるを得ないが、そのとき、あまり長い時間をかけずに一致した全員の結論は、あの手紙は本来文学報国会理事、菊池寛に属するものであって、もはや中野個人のものではない故に、その申し出に対して、「写し」を送るということになったのであった。

松下裕校訂による近刊の中野重治「敗戦前日記」(一九九四年一月、中央公論社)の一九四三年(昭和18年)二月十三日(土曜日)の項に次の記事がある。

晴

原四谷その他へ出かける。野菜配給。サカナ屋。午後甲子社という本屋来る。茂吉の本をかけと。断る。

福井夫人板橋母子をつれて来る。筑摩検印紙来る。300枚。平野謙氏来訪。

平野謙は「敗戦までの私」(「群像」昭和41年5月、のち「わが戦後文学史」に収む)で(私が情報局をやめようと思つて、中野重治に相談にいったとき、私は私の体験をぶちまけるべきだった)と書いている。平野謙こと平野朗は、昭和十六年二月二十一日付で情報局嘱託となり、昭和十八年六月に退職するまで情報局第五部第三課に勤めた。情報局の機構については、「日本文学報国会会員名簿」昭和十八年度版の復刻(一九九二年五月、新評論)に当つて、別冊解説として添えた拙稿「総力戦体制下の文学者——社団法人「日本文学報国会」の位相」でも触れたが、第一部(企画)、第二部(報道)、第三部(対外)、第四部(検閲)、第五部(文化)に分かれ、第三課は、(文学、音楽、美術、其ノ他ノ芸術一般ニ依ル啓蒙宣傳ノ実施及指導ニ関スル事項)を主管する部署であった。先の「文学者の責務」の座談会で本多が弁じた平野の中野重治論については、中野の六月十三日(日曜日)の日記中に、「新潮」で平野謙おれの事を論じているがよく分からず、特に結論のところ不明。倍位の長さで書いたらもう少しはつきりしたろうか。」と記述されている。私は前記の別冊解説の中で、(菊池寛への手紙は、中野の「甲乙丙丁」にそのまま引用されてい

る。この書簡のコピーが、平野謙を通して戦後中野自身の手許に戻ることになったのだが、情報局嘱託平野朗が、中野の心情を付度して、自分一己の責任において、課長の机から秘かに持ち出した友情ある勇断? については、その後の処置と共に、いささか釈然としない不透明な部分をも含み込んでいる。)と書いた。堀谷雄高は(それを敢えて盗み出してしまふほど平野謙は熱烈忠実な中野重治ファン)と言うが、中野重治の名誉のため故の勇断だとするならば、平野がそれを戦後にまで秘蔵し、中野に一言のことわり、無しに秘匿した経緯は、はなはだ不分明であり、奇怪である。先の中野の日記に明らかなことく、昭和十八年二月十三日に、平野はみずからの意志で訪れ、中野重治その人と対面しているにもかかわらず、である。対面せずとも、手紙でそれを知らせ、中野の意向を訊ねる機会と時間的余裕があったにもかかわらずである。戦後に平野ら「近代文学」同人が、中野重治を囲む座談会を企画し誌上に発表された(「近代文学」第3号、昭和21年4月)ことはすでに記した。戦後においても、対面の機会は一度ならずあったのである。しかも、(長年敬愛してきた中野重治と論争するようになって「私は哀しい」と悲痛に記した)平野謙が、中野から「反革命に流し目をしている」ときめつけられたにせよ、論争のさ中にこれまで己れの一存で秘匿してきた菊池宛の中野の書簡を、同人達に公開する勇断? を敢えてしたその心根は、不透明であり、堀谷のいう、「公正」さに欠けるように思われる。

(つづく)